

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(中学校用)

都道府県名	鳥取県
-------	-----

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	智頭町立智頭中学校					
学 年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	3	3	1	10	24
生徒数	108	98	104	2	312	

研究の概要

1. 研究主題

基礎・基本の定着をめざした学習指導法の工夫改善

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

・全学年・全教科
学力の定着をめざした研究を学校体制で取り組むため。

(2) 年次ごとの計画

平成14年度	<p>テーマ 基礎・基本の定着をめざした学習指導法の工夫改善 研究の見通し 研究内容の ~ を実践すれば学力は向上する 研究内容 各教科の基礎基本の定着と評価の工夫 各種検査等による生徒の学力分析を生かした指導の改善 個に応じた指導とわかる授業の工夫 研究方法 教科の基礎基本の把握と定着のための評価と工夫 ・標準学力検査、学習適応性検査など諸検査の実施と活用 ・基礎基本を意識した年間計画の作成 ・絶対評価を取り入れた評価規準の作成 ・基礎テスト、小テストなどによる繰り返し学習 個に応じた指導方法、指導体制の工夫 ・少人数指導、TT、選択教科の工夫 ・教え合い学習、朝読書、7校時授業の導入 ・智頭小学校との授業交換</p>
--------	--

平成15年度	<p>テーマ 基礎・基本の定着をめざした学習指導法の工夫改善 仮説 個に応じた指導方法を工夫して基礎基本の学習時間を確保すれば、生徒の学力は定着する。 研究内容・方法 授業技術の向上をめざして。 ・授業研究会の充実と授業の公開 ・少人数指導、TT指導など指導法の工夫改善 ・指導と評価の一体化 ・新入生テスト、NRT、AAI等の諸検査の活用 ・生徒・保護者等の授業評価の反映</p>
--------	---

	<p>反復学習の時間確保の工夫。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・45分授業による7校時(30分間)の効果的な活用 (5教科の反復学習中心、学年ごとに教材の検討と蓄積を行う) ・授業での基礎基本の繰り返し学習の工夫と家庭学習の時間確保 (小テスト、宿題プリント、百マス計算、転写ノートなどの活用) ・家庭への発信・連携 (学校・学年・学級通信、PTA等で協力要請) 智頭小学校(町内小学校)との連携。 (合同授業研究会、公開授業の相互参観、小中連絡会の充実など) 2年間の研究集録(中間まとめ)作成
--	--

平成16年度	<p>テーマ 基礎・基本の定着をめざした学習指導法の工夫改善</p> <p>仮説 個に応じた指導方法を工夫して基礎基本の学習時間を確保すれば、生徒の学力は定着する。</p> <p>研究内容・方法 授業技術の向上をめざして。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業研究会の充実と授業の公開 ・少人数指導、TT指導など指導法の工夫改善 ・指導と評価の一体化 ・新入生テスト、NRT、AAI等の諸検査の活用 ・生徒・保護者等の授業評価の反映 <p>反復学習の時間確保の工夫。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・45分授業による7校時の再検討 (5教科の反復学習中心、学年ごとに教材の開発、蓄積を行う) ・授業での基礎基本の繰り返し学習の工夫と家庭学習の時間確保 (小テスト、宿題プリント、百マス計算、転写ノートなどの活用) ・家庭への発信・連携 (学校・学年・学級通信、PTA等で協力要請) 智頭小学校(町内小学校)との連携。 (合同授業研究会、公開授業の相互参観、小中連絡会の充実、出前授業など) 研究のまとめと報告
--------	--

(3) 研究推進体制

昨年度は、学習場面全般で学力向上の方法を探ってきた。本年度は、学力の定着は個に応じた授業にあると仮説を立て、授業づくりを中心的な課題とした研究組織に再編成した。

まず、少人数部会では、国語科・英語科で少人数指導について研究した。TT部会は数学科・理科を中心にTT指導について研究した。技能教科を中心とした評価指導部会では、評価を指導に生かす授業を研究した。さらに、連携部会では小中連携、保護者との連携のあり方を中心に研究を進めた。研究組織とその構成は下の図の通りである。

```

graph TD
    A[校長  
教頭] --> B[研究推進委員会]
    B --> C[全職員校内研究会]
    C --> D[教科部会]
    C --> E[連携部会]
    D --> F[少人数部会]
    D --> G[TT部会]
    D --> H[指導評価部会]
    F --> I[教科会]
    G --> J[学年会]
    H --> J
    E --> J
  
```

平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

本年度より「個に応じた指導方法を工夫して、基礎基本の学習時間を確保すれば、生徒の学力は定着する。」という研究仮説を設定した。まずは基本的な学力を身につけることが重要と考えたのである。その基礎ができれば思考力・表現力や意欲・態度なども形成されると考えて研究に取り組んできた。

授業研究会等の実施

・教科の研究部会が中心となって3回の授業研究会を実施することができた。連携部会としては智頭小学校との合同授業研究会を2回実施した。

・学校の公開学習として、1学期に学力向上に関する授業公開を実施した。

・郡の教科部会を中心に、英語と美術で初任者研修の研究授業を実施した。

・互いに授業の検討をしたり、保護者・生徒の授業アンケートをもとに話し合いを進めたりと、教員の授業技術の向上をめざした取り組みを実施できた。

国語、英語の週3時間のうち1時間を少人数授業とした。生徒の習熟度、希望をもとに基礎・応用コースを設定し、コースに対応した教材づくりを中心に研究に取り組めた。英語科のアンケートでは、少人数の方が学習しやすく、やる気になって取り組めたという肯定的な結果がみられた。特に、基礎コースでは8割程度の生徒が学習しやすいと解答をした。国語科では文法・作文などの単元にしばって少人数指導を実施した。一斉授業時より添削指導などがきめ細やかに指導でき、アンケートも6割程度の生徒が少人数指導に肯定的な解答をした。

数学と理科の週3時間のうち1～2時間をTTの時間として扱った。理科では説明・演示の役割を分担して実験をしたり、机間指導などに効果的にTTを活用できた。また、互いに授業を見合うことで授業改善の姿勢が生まれ、T1とT2を交代して授業を行うなどの取り組みも実施できた。数学では授業中の机間指導、ノート点検、課題のチェックなどに効果的な活用ができた。TTだと質問がしやすいという生徒の反応があった。

指導評価部会では、技能教科で評価カードの効果的な活用などを研究した。生徒が前時の反省を生かして、目標を持って授業に取り組めたり、教師のコメントを見て自己理解が深まるなどの効果が見られた。

連携部会では1学期は、町内の小学校に本校の研究授業、公開授業などの案内を出して参観を呼びかけ助言をいただいた。2学期には智頭小の算数部会と本校の数学部会、小中の国語部会が合同で2回の授業研究会を実施した。研究会の意見交換でそれぞれの発達段階での課題などについて相互の理解が深まった。

新入生に小学校の算数と漢字のテストを実施した。その結果、漢字書き取りは、4年生あたりから、算数でも4年生の少数あたりからのつまずきが見られた。学習適応性検査では学習環境の得点に低い結果が見られた。1年生の数学と漢字については小学校の4年生段階の復習や百マス計算などで対応した。小中連絡会でも、学力や学習環境の問題点を報告したり、保護者にもたよりやPTAなどで協力を呼びかけた。

反復学習の時間確保による学力定着の試み。

・昨年度後半から45分授業として30分間の7校時を設定した。5教科の基礎の復習や補充学習の時間として学年ごとに取り組んだ。

・小テストやプリントを工夫して授業の中でも反復学習の時間を確保したり、より教材を精選して授業を展開した。

・転写ノート、プリントなどで家庭学習の時間を確保したり、計画表を作成して自主的に家庭学習に取り組める工夫をした。

学力向上フロンティア事業講演会の実施。

1月30日に、「低学力を克服する取り組み」と題して、大阪州市市岡中学校の小河勝先生の講演会を実施した。講演会の前には、本校の研究活動について助言をいただいた。郡内の中学校、町内の小学校、本校の保護者に呼びかけて30名程度の参加があり、小学校段階や家庭生活に於ける学力低下を防ぐ取り組みについて研鑽を深めることができた。

2. 今後の課題

授業時間の削減により、ただでさえ基本的内容の反復学習の時間がなくなっており、反復学習の時間確保が課題である。一教員の対応には限界があり、今後とも学校体制で取り組んでいくことと、効果的な取り組みにしていく工夫が必要である。

少人数指導に関しては、週の1時間に対応しているが、別教材を設定している

ため授業の進度やコース別の教材開発の時間確保に課題がある。全授業ということになるとTTも含めて、教員の配置などその年度になってみないと対応できないという実態がある。

少人数のコース分けに関しては、学級の学力に差がない場合は均等割、差がある場合は習熟度割が望ましいと考える。しかしながら、あまりに少人数やTTなどの方法にとられすぎて本来の一斉指導がおろそかになる傾向がある。むしろ30人学級にして教員の指導力の向上をめざした取り組みを進める方が望ましいのではないかと考える。

PTAやたよりなどで家庭学習、食事などの生活習慣について呼びかけてきた。学校でも指導は続けているが家庭学習の習慣化には課題が残った。

新入生テストや小学校との合同授業研究会など智頭小を中心とした小中連携に力を入れて取り組んできたが、無理なく続けていける取り組みに改善していくことも課題である。

研究を進める中で、基本的な計算や音読などが脳の前頭前野の発達に効果があることがわかってきた。しかし、子どもの生活習慣（食事やTVゲームなど）の変化や時間数・教育内容の削減による基本的内容の反復学習の時間の減少が学力の低下に影響していることがわかってきた。また、これは全国的な傾向であり、学校現場だけの努力ではなく、文教政策の見直しも必要ではないかと考える。

学力把握のための学校としての取組

標準学力検査（1年4月実施）（1・2年3月実施）
学習適応性検査（全学年5月）
知能検査（1年4月実施）
新入生基礎学力テスト（漢字、算数4月実施）
基礎テスト（1年）定期テスト・実力テスト（全学年）
鳥取県基礎学力検査（2年1月実施）
生徒、保護者対象アンケート（授業、生活）

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

学力向上フロンティア事業講演会
・日時 平成16年1月30日
・開催場所 智頭中学校
・対象 郡内中学校、町内小学校、本校保護者
・内容 低学力克服の取り組みについて（小河勝先生）
鳥取県教育研究発表会
・日時 平成16年2月9、10日
研究集録（中間まとめ）の作成・配布（郡内中学校、町内小学校対象）

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 3学級以下 4～6学級
 7～9学級 10～12学級
 13～15学級 16学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 その他
- 【研究教科】 国語 社会 数学 理科
 外国語 音楽 美術 技術・家庭
 保健体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無